

くある。実際、私自身の経験に照らしても、大学一年のときの授業は今でも断片的ではあるが記憶に鮮明に残っているし、あの当時の授業から自分の歴史への関心も定まっていたことを思い出す。

今回、「連続講演会」を聴いての感想をもう一つ述べれば、同じ史学系の学問とはいつても日本史、東洋史、西洋史、考古学の研究者が一堂に会し、同じ時間に話をする機会は、早稲田大学の文学学術院の授業のなかで他にほとんどないということである。地域を横断し、先史時代から現代まで含めて、過去を探究する学問とは何かを短時間のうちに聴くことは、学生にとり得難い経験となろう。一人あたり十五分から二十分程度の講演の時間は短かいとは思いますが、このような企画が今後も毎年続くことを願っている。

最後に、開催にあたり貴重な授業時間の一部を提供して下さった先生方と、当日の運営に協力していただいた各コース助教、助手の方々に心より感謝の意を表したい。

〈第一回〉

史料との出会い、学問との出会い

寫田 修

本連続講演会のテーマは「わたしと歴史学、わたしと考古学」ですが、私の場合、歴史学という対象が自明のものではなかったということを、はじめに言っておかなければなりません。つまり私は、はじめから歴史学を志したわけではなく、色々と紆余曲折を経ながら現在に至っているということとです。ならば今日は、わたしと歴史学との関係について、私自身が通ってきた道をそのままお話しすることで、講演会のテーマに近づけられるのではないかと考えました。よって今日は、「わたしと歴史学（との関係）」がどのように作られていったのかということをも、自分自身の経験に即して話したいと思います。

私は、学部時代は近代文学を専攻していました。但し、文学と言っても、ある作品

の中身を解釈していくこと以上に、文学そのものを成立させている環境・土台、例えば新聞（新聞小説）や雑誌などに興味がありました。ですので、文学研究という点では、自分がやろうとしていることはどちらかといえば主流ではないという状況もあり、それを続けていくことに迷いがありました。

そんな折、当時アルバイトをしていた所が主に歴史の原史料を取り扱う箇所、生の史料をみる機会を持つことになりました。その時私はまだ学部の学生でしたので、原史料を見ることはほとんどない状況です。このように、原史料に触れる機会を持てたことによつて、歴史というものに親しみが湧いたということがまずは言えると思います。

しかし、それだけでは歴史学に進もうという決心を持つまでには至らないと思います。当時、右記の仕事の一環でいわゆる文書史料にも日常的に接していたのですが、最初は何が書いてあるのかさっぱり分かり

ませんでした。でもそれは無理もないことで、今からおよそ数百年も前に書かれたものが素人にスラスラ読める訳もありません。そこで思ったことは、その当時の人々が生きている環境をはじめとして、あらゆることが今とは違う（もちろん共通する部分もあります）というごく当たり前のことでした。そんなことに、史料を通してあらためて気づいたわけです。しかしそれは逆に考えてみれば、そこを埋めていくのが歴史学の醍醐味なのではないか、現在との距離感を感じつつ、史料に向かっていくことが歴史学の面白さの一つなのではないか、とも思いました。分からないことを楽しむ、と言い換えても良いかも知れません。そんな経験を経て、大学院に入り歴史学を専攻することになります。私の場合、以上のように、史料との出会いを通して歴史学と出会ったわけです。

次に、学問としての歴史との出会いについても話しておきたいと思います。大学院に入る前は、まだどちらかと言うと、史料

を「みる」「ながめる」という感じだったのですが、大学院に入り学問として歴史学をやる場合は、史料を「読む」、そして、史料「から考える」ということも必要になってきます。現在私が研究で使っている史料に帳簿関係の史料があるのですが、帳簿史料ですので一覧表のような形でしか史料は語ってくれません。そこで、こちらは別の史料などを突き合わせたりして、またはそれぞれの史料の生成過程などを調べたりして、史料から色々と考えていく作業をします。つまり、これまで経験してきた、「原史料への感動」のようなものとはまた違ったレベルでの史料への接し方が必要となってくる、ということになります。

また、学問としての歴史という点で、これまで中学高校などで学んできた、教科書中心の歴史の勉強との違いについても述べておきたいと思います。教科書・問題集には答えがありますが、大学で学ぶ歴史には答えはありません。なぜなら自分でそれを導き出すからです。まずは自分で問題を見

つけ、問いを立て、その問題について調べ、論証し、結論を導き出さなければならぬということですね。史料についても自分の足で探さなければならぬ場合が多いです。また右記の根底にあるものとして、研究テーマを自分で決める、ということも重要です。私は、教育に関する歴史を研究テーマとしていますが、それは、私のなかに教育に対する様々な思いがあったからです。皆さんも、何かしら自分の心の中に引かかる問題があるかと思います。それを大切に「育てて」いって、卒論などの研究に活かすことも可能だと思います。大学院における学問との出会いによって、以上のようなことを考える日々が続きました。

このように、私にとって「わたしと歴史学（との関係）」は、偶然と必然のなかで進んできました。偶然というのは、史料との出会いであったり、大学院における学問との出会いであったかも知れません。また必然というのは、自分の研究テーマの選択であったのかも知れません。これまで私自

身の経験に即して話をしてきましたが、皆さんにも、これから皆さんりの様々な出会いがあると思います。それは人との出会いでも、本との出会いでも、何でも良いと思います。それら一つ一つの出会いを大切にして、大学生活で何を学びたいのかをじっくり考えていただければと思います。

中国古代の天文・占術と文化

小倉 聖

1. はじめに

私は元々高校の時世界史をあまり勉強しておらず、吉川栄治氏や司馬遼太郎氏等の歴史小説を好んで読んでいた。中国史を専門にしようと思ったのは、宮城谷昌光氏の『孟嘗君』を読んだのがきっかけである。

大学入学後、学部では史学科、大学院の修士課程で中国哲学を専門にされている先生の元で勉強し、博士課程で歴史学系のコースに所属することとなった。現在では

中国古代の天文・占術を研究している。

歴史学系では文化史的な観点から天文や思想史の分野を研究可能であり、非常に懐が深く扱えるものが広い。

次に歴史学の懐の深さ、その扱える範囲の広さについて自分の研究を踏まえて、もう少し詳しく述べたい。

2. 現在の研究

私が現在研究しているのは「刑徳思想」もしくは「刑徳占い」といったものである。刑・徳という観念は中国の春秋・戦国時代において、政治・時令・災害と関わる重要なものだった。それが陰陽学説によって刑・徳は陰陽の観念となり、後に吉凶を含み、最終的に占術中の吉神・凶神となった。実際、このような刑・徳は天上を移動し、その運行形態・運行周期に基づいて占いが行われるようになった。

戦国時代から漢代にかけて、陰陽や占いの観念と刑・徳はなったが、伝世文献では『淮南子』天文訓に代表され、そこでは大

きく二種類に分けられている。一つ目は北斗七星の動きと連動した毎月の刑・徳の動きである「刑徳七舍」、二つ目は太陰の動きと連動した毎年の刑・徳の動きである「二十歳刑徳」である。太陰とは、十二辰で分割された天の「丑寅」と「未申」を結ぶ線を軸として歳星（木星）の位置と左右対称に置かれた観念上の天体である。

両者共に独自の理論を持ち、それぞれ異なる形で社会に受容された。前者は『太平経』等に見え、主に刑徳の動きから陰陽の盛衰・強弱を測るものとなった。陰が強い場合は生物・植物の活動が弱まり、逆に陽が強い場合は生物・植物の活動が活発になる。一方、これに対して後者は伝世文献では『漢書』等にもその使用例が見え、進軍方向の吉凶などを占う軍事占として用いられている。今回は前者の刑徳七舍について述べたい。

3. 刑徳七舍

先ほど述べたように、刑徳七舍は陰陽の